



## 編集後記

東日本大震災から丸7年が過ぎた。

未曾有の天災と口でいうのは容易い。しかし日本ほどの技術力と経済力がありながら、未だに仮設住宅に住む人がおり、故郷に帰れない人がいるというのは異常事態ではないだろうか。地震と津波の被害は天災であるのは間違いないが、そこから元の生活、とまで言わないまでもせめて人並みの生活に戻れるようにできないのは、これはもはや人災と言わざるを得ない。もちろん、福島における原子力発電所の事故が人災であることは言を待たないが、地震や津波の被害をリカバリーできないのは情けない限りである。

そんな気持ちを含めて、「特集：7年目の東日本大震災」を組んでみた。地震・津波被害発生直後に聞いた、被災者の「復興はいらぬです、必要な

はず復旧です」という言葉が耳に残る。単に物理的なことだけでなく、目に見えない部分にも目を向けた対応が必要であり、まして言わんやそこに関与する為政者や行政の売名や自己満足のための「復興」ではなく、もとそこにあつた生活者たちの物心両面の復旧こそ肝心なのだ。どうも復興復興と騒ぐ風潮には違和感を覚える。

特集の中で取り上げた写真家、オヤマズヨシ氏は本人が被災地の出身であり、震災発生と同時に現地に駆けつけたが、シャッターを押せずにいたという。メディアが取り上げる災害の状況を伝える写真は、往々にして災害の悲惨さや悲しみを訴えるものが多い。オヤマ氏に言わせれば、それは基本的に「隠し取り」がほとんどなのだという。そんな彼が被災者に寄り添い「撮りますよ」と声をかけた瞬間、ファインダーの中には笑顔が見えてくるのだそう。悲しくないわけではない、決して悲惨でないわけではない。でもある意味笑うしかない：それがオヤマ氏の言葉である。被災地の人たちは「勝つ」とは言わないのだという。だから「マゲナイゾ」なのだ。

戊辰戦争の時代に「白河以北一山百

文」ということばがあつたという。戊辰戦争以来、新政府軍を率いる薩長土肥勢が東北地方を卑下して用いたものと言われ、「白河の関所より北の土地は一山で百文にしかならない荒地ばかり」という侮蔑表現であつたそう。奥の細道に登場する「白河の関」が単に物理的な境界線以上の意味合いを持つようになった要因でもある。しかしながら、いまやこのフレーズは東北の人たちの反骨精神を示すものとして用いられ、地方紙「河北新報」の名前の由来となり、岩手県出身の平民宰相・原敬の「二山」という雅号の由来となつたと言われている。

「マゲナイゾ」と「白河以北一山百文」……この二つのフレーズには共通する何かがある。東北の人々の粘り強さや反骨精神のためにこうしたフレーズが登場するのは大歓迎だが、復興・復旧の遅れの背景に、こんな考え方があつては決してならない。

東北の方たちの粘り強さや忍耐強さに甘えて、これ以上復興・復旧が遅れることがあつてはならないのだ。

一日も早く、復興住宅に住む人がゼロになり、本来の意味での笑顔が被災地に戻る日を待ちたい。(溪)

月刊公論 MONTHLY  
**KORON**

4月号 第51巻4号

平成30年4月1日発行 毎月20日発売  
本体価格848円(税別) 送料86円

発行人 大中吉一 編集人 林 溪清  
発行所 株式会社財界通信社  
〒160-0008 東京都新宿区三栄町25ポナフラービル  
TEL.03-5379-5611(代)、FAX.03-5379-5616  
印刷所 株式会社廣済堂  
取次店 日本出版販売/大阪屋栗田

●直接ご購読をご希望の方は、本社までお問い合わせ下さい。  
●万一、乱丁、落丁などの不良品がございましたら、お取り替えいたします。